

## ‘大津四号’の果実品質は後期摘果下垂着果法により向上する

後期摘果下垂着果法は、6月に強い新梢の芽かき、相互遮蔽部や枯れ枝及びすそ枝を剪除する程度の弱剪定と10月に大玉果及び小玉果中心の後期摘果を組合わせた着果法です。この方法を‘大津四号’に適用して、従来の隔年交互結実法と比較すると、果実品質がより向上し、商品性の高いLM級果実を効率的に生産できます。

表1 ‘大津4号’における着果法による違いが果実品質に及ぼす影響

処 理 区	糖度(Brix%)				クエン酸濃度(%)			
	06	07	08	09	06	07	08	09
後期摘果区	12.1	11.3	12.6	12.5	0.97	0.88	0.75	0.89
交互結実区	11.1	10.8	11.4	11.7	0.84	0.81	0.68	0.88
有意性 <sup>w</sup>	**	*	**	ns	ns	ns	ns	ns

z：数値は、1樹当たりL級果15果の平均

w：有意性は、t検定による(\*は5%水準、\*\*は1%水準で有意差あり)

表2 ‘大津4号’における着果法による違いがLM級果率及び樹容積当たりのLM級果数の4か年合計に及ぼす影響

処 理 区	LM級果率(%) <sup>z</sup>				樹容積当たりのLM級果数 <sup>y</sup> (果/m <sup>3</sup> )
	06	07	08	09	
後期摘果区	67.0	68.3	70.6	69.3	54.5
交互結実区	56.2	54.9	58.8	56.6	57.1

z：LM級果率の交互結実区は、結実樹のみの平均

y：06-09の4か年の合計